

# いま伝えたい

## 被爆者から

私は、1940年11月に広島市で5人姉兄の末っ子として生を受け、翌1941年12月に太平洋戦争が始まりました。戦況は日本がだんだんと不利になり、食べるもの、着るもの、生活用品などがなくなっていきました。夜は灯火管制で電気はつけられません。真っ暗な中、空襲警報が鳴ると、手探りで防空頭巾をかぶって防空壕に避難します。夜、起こされて引っ張って行かれた嫌な記憶があります。

### 4歳の時、広島で

1945年8月6日、広島は晴れ渡った、とても暑い朝を迎えました。父は仕事に、姉兄たちは学徒動員や学校へと出かけ、家には母と4歳の私

## 〈23〉核兵器は一発も残してはならない



石川県原爆被災者  
友の会会長

西本多美子さん(75)

昨年のNPT再検討会議の原爆展であいさつする西本さん(ニューヨークの国連ロビーで)

が大したけがもやけどもなく助かったのは、奇跡といえるかもしれません。

### 差別と偏見に

現在、夫の転勤で石川県金沢市に住んでいます。石川県では被爆者が極端に少ないこともあって、差別と偏見に苦しめられ隠れるように生きてきた人たちが多くいます。男性は赤紙で徴兵され、広島に救援に行かされて入市被ばくした人たちが大半ですが、この人たちに放射線のすさまじい被害が出ているのです。さまざまながん、心疾患、肝機能障害、甲状腺異常…。10数年前から被団協がとりくんだ原爆症認定集団訴訟運動のなかで、放射線、放射能が長期にわたり、いかに人間をむしばみ続けたかが証明されました。

私たちが被爆者は、死と背中合わせで生きてきました。子や孫の健康への不安も尽きません。核兵器と人類は共存できません。1発も残してはならないのです。被爆者は核兵器廃絶を心から求めます。「ヒロシマ・ナガサキの被爆者が訴える核兵器廃絶国際署名」を世界中から集めましょう。

奇跡的に助かって  
しばらくすると静かになったので、恐る恐る押し入れから出てみると、家はめちゃくちゃに壊れて瓦礫の山、足の踏み場もありません。外に出て

### 奇跡的に助かって

しばらくすると静かになったので、恐る恐る押し入れから出てみると、家はめちゃくちゃに壊れて瓦礫の山、足の踏み場もありません。外に出て

みると近所の家全部が同じように壊れ、道路は瓦礫の山です。小学3年の姉が血を流して泣いて帰ってきました。母は姉の後ろ首に刺さった木切れを抜き、赤チンを塗りましました。私たち母娘は、命からがら郊外のブドウ畑へと避難しました。私たちの隣のむしろには、女学生とおぼしき人が寝かされていました。髪はチリチリに焼け、顔はドッジボールのように腫れあがり、うめき声も出せません。まもなく亡くなられたことでしょう。

ここで3日3晩、野宿しました。食べ物はいすしの乾パンだけ。青いブドウをとって食べました。そのせいか、熱が出て、吐いて下痢をし、赤痢のような症状が出ました。放射線による急性症状だったんですね。この新型爆弾のせいで、広島には70年間草木が生えないと言われました。家族全員

(金沢支部ひかり班)